立教大学学術推進特別重点資金（立教ＳＦＲ）
大学院学生研究
２０１８年度研究成果報告書

研究科名	立教大学大学院　文学　研究科　日本文学　専攻			
研究代表者（2019年3月現在のものを記入）	在籍課程・学年・学生番号	氏　名		
	文学研究科日本文学専攻 博士課程後期課程２年・17PG001D	加藤　明日菜　印		
指導教員	所属･職名	氏　名		
	文学部教授	金子　明雄　印		
自然・人文・社会の別	自然　・　人文　・　社会	**個人・共同の別**	個人　・　共同　名	
研究課題	日本近現代文学における食―その欲望と表象をめぐって			
研究組織（研究代表者・共同研究者）※2019年3月現在のものを記入	在籍研究科・専攻・課程・学年	氏　名		
	文学研究科日本文学専攻 博士課程後期課程２年	加藤　明日菜		
研究期間	２０１８　年度			
研究経費（1円単位）	（支出金額）２００,０００円／（採択金額）２００,０００円			

研究の概要（200～300字で記入、図･グラフ等は使用しないこと。）

明治期以降、欧米文化を受容し近代化を目指す中で日本の食生活は変容し、また様々な文化現象も現れた。食は日々の生活の基盤であり、日本近代文学の作家たちもその動向とは無縁ではなく、作中に様々な食が描かれた。本研究では、その中でも特異と思われる食モチーフを展開した昭和期の作品を複数取り上げ、作品発表当時の食文化動向を参照することでその食モチーフの社会的背景を明らかにしようとするものである。具体的には、佐藤春夫「のんしやらん記録」(1929)を食糧問題、矢田津世子「茶粥の記」(1941)を娯楽的食情報の流通と戦時下の食糧統制という観点から検討し、また昭和初期のモダニズム作家である尾崎翠の作品群については登場する食物の同時代的背景を探りつつ、食物／摂食行為が異化され、物語展開上の重要な位置を占めるという、食に纏わる尾崎の表現技法を検討した。

キーワード（研究内容をよく表しているものを３項目以内で記入。）

〔　昭和初期　〕〔　食通　〕〔　食糧問題　〕

研究成果の概要（図･グラフ等は使用しないこと。）

本研究は、特異な食モチーフを展開した昭和初期の作品を複数取り上げ、作品発表当時の食文化動向を参照することでその食モチーフの社会的背景を明らかにすることを目指すものである。本研究は当初、欧米化／近代化していく日本の食文化の変容を踏まえつつ、文学作品に現れた食に纏わる欲望の検討を目指すものであり、矢田津世子「茶粥の記」の他には上司小剣「鱧の皮」(1914)、芥川龍之介「芋粥」(1916) の食表象を検討することを予定していた。しかし、調査を進めるうち、食に纏わる動向が欧米文化の単純な受容に留まらず、都市計画や政府の食糧政策、栄養学の発展等様々な社会的／政治的動向と深く結びついており、そのような動向を背景に、ある食物／摂食行為を望む〈欲望〉という観点では収まりきらない食表象が少なからずあり、そうした表象の方が文学というイマジナリーな領域の特質とより密接に結びついており、食に関する表現として着目すべきものであると思われ、研究対象とする作品を変更し、また問題編成も当初のものより変更した。

以下、計画の変更後に行った研究の成果を記述する。

（１）矢田津世子「茶粥の記」(1941) における特異な食通及び粥の表象の考察

本作は 1980 年代以降グルメ小説として再発見・再評価されてきたのであるが、その際、①実食せず伝聞知識のみで想像上の美食を楽しむという風変わりな食通表象の社会的背景、②発表時期及び作中時間が日中戦争下であるという同時代状況は看過される傾向にあった。そこで、様式３－①ａの論文では、①の社会的背景を明らかとし、②の時代背景を踏まえ、本作のもう一つの重要な食モチーフである「粥」の意味合いを考察した。

①食べない食通という造形とその背景としての食メディア状況

1930 年から翌年にかけて「趣味の通の要諦」を述べたという『通叢書』シリーズ（全 47 巻）から食に関連した書物が 12 巻刊行されていたが、同時期、新聞には食味評論記事が連載されて人気を博し、それを纏めたものが単行本として刊行されていた。東京日日新聞社会部編『味覚極楽』(光文社、1927 年 12 月)、時事新報社家庭部編『東京名物食べある記』(正和堂書房、1929 年 12 月)、食辛抱編『美味珍味』(丸ノ内出版社、1933 年 7 月)、『美味珍味』を加筆修正した安井笛二編著『食味漫談』(丸之内出版社、1934 年 8 月)、読売新聞婦人部編『食通放談』(秋豊園出版部、1937 年 7 月）などがその具体例として挙げられる。また『東京名物食べある記』の記事をいくつか引き継いだものとして白木正光編著『大東京うまいもの食べある記』昭和 8 年版（丸ノ内出版社、1933 年 4 月）がある。白木版、白木版を更に加筆修正した安井笛二著『大東京うまいもの食べある記』昭和 10 年版（丸ノ内出版社、1935 年 5 月）は共に人気を集めた（近藤裕子「解題」、近藤裕子編『コレクション・モダン都市文化第 13 巻　グルメ案内記』、ゆまに書房、2005 年 11 月)。またこうした状況と呼応する形で、魚谷常吉『味覚法楽』(秋豊園出版部、1936 年 7 月）では、当時の食通の中に「現代に最も多い食通で、新聞、雑誌、書物の上の研究と、人の口から伝はつたのを、食ひもしないで盛んに吹聴する」という「似而非通人」がいると述べられている。

以上のことから、関東大震災以降の 1920 年代から 30 年代にかけて食味評論の出版が盛んになり、食情報が娯楽コンテンツの一つ、情報商品として扱われていたと整理することができよう。つまり、食味評論が娯楽的物語として抽象化・自立化し、読者が自身の食生活とは無関係に情報として楽しむことが出来る状況が出現し始めていたのであり、実食しない食通という特異な在り方が矢田自身の独創ではなく、時代状況に影響を受けたものであると考えられる。

②作中における「粥」の意味合い

発表時期及びそれとほぼ同時期と推測される作中時間は日中戦争下において、「粥」は節米食として奨励されていた。一方、作中では主人公一家のつつましい御馳走として、また実食しない食通である鈴木が唯一実食を伴って食味評論した食物、つまり胃弱の鈴木が唯一食べられた美食として描かれており、日常の中の僅かに非日常的な食として小市民的生活と食通というモチーフとを接続する回路として機能しているものとして本作の「粥」表

研究成果の概要　つづき

象の性格を整理できる。

（２）尾崎翠作品における食モチーフの考察

尾崎翠は昭和初期に活躍したモダニズム作家である。寡作な作家であったが、食に関する描写が初期から後期にかけて一貫して見られる。そこで、様式３－①ｂの論文では、初期から後期の作品における食モチーフを検討し、作品ごとの特色を抽出しながら、初期から後期にかけて食モチーフが単なる小道具的存在から物語内容そのものに密接に結びついてゆく様子を検討し、同時にそれらが持つ同時代との符合性／差異性についても考察を加えた。

初期から中期にかけての作品、少女小説においては、食モチーフはそれに先行する物語内容に添えられた小道具的存在であり、また作家的成熟を迎えつつあった時期に執筆された「香りから呼ぶ幻覚」（1927）や「アツプルパイの午後」（1929）では同時代における牛乳イメージやカルピスのコピーのパロディ的性格を帯び、物語内容の重要な一部を担うもののやはり食とは離れたところで物語が展開する。これに対し、1931 年以降の作品における食モチーフは抽象的な物語の具体的理解を促し（「途上にて」（1931））、物語の中心に位置する恋愛模様に奉仕し（「第七官界彷徨」（1931）「歩行」（1931））、そして物語や主人公の幻想性とは裏腹にその逼迫した現実を暗示する「こほろぎ嬢」（1932））。ここにおいて、食モチーフは物語内容と強く結びつき、その理解や展開を支えている。食が主要なモチーフとなる時、食べる快楽や美食といった形で登場しやすいが、そこにおいて食物はただ食べる対象として、摂食行為は食すという快楽そのもの、あるいは美味を楽しむ手段として描かれる傾向にある。しかし、尾崎翠作品における食描写は食物が生々しい味覚や食感を伴わない記号的なものであり、食に対するこの禁欲的な態度こそが尾崎作品において食モチーフの様々な展開を可能にしたと言える。

しかし、今回の論文では尾崎翠の食モチーフに関して作品ごとの特色を抽出し、初期から後期にかけての変遷を辿るのみで、彼女が身を置いたモダニズムという芸術思潮との関連にまで踏み込むことができなかった。食を記号的に描く尾崎の表現はモダニズムという芸術思潮とどのように関連するのか、という点については今後の課題としたい。

（３）佐藤春夫「のんしやらん記録」（1929）と食糧問題と関係性についての考察

佐藤春夫「のんしやらん記録」は、近未来都市「ノンシヤラン市」を舞台としたアンチ・ユートピア小説であり、佐藤自身が「風刺小説」（諏訪三郎「解説」、『明治大正文学全集第 40 巻　志賀直哉・佐藤春夫』、春陽堂、1929 年 6 月）、「文明批判」（平野謙・伊藤整・佐藤春夫鼎談「大正作家」、『群像』第 19 巻第 6 号、講談社、1964 年 6 月）を意図して書いたものであると語っている。作中では「食用瓦斯」と「飲用瓦斯」が人々の食糧であり、日光や水と共にその配分は政府によって徹底的に管理されており、下層社会の人々は常にその不足を感じているが、こうした設定はアナトール・フランス『ペンギンの島』（1908）から着想を得たものと指摘されている（河田和子「佐藤春夫「のんしやらん記録」補論――文壇的背景と賤民文学の試み――」、『尚絅語文』第 4 号、尚絅大学文化言語学部・日本文学懇話会、2015 年 3 月）。

一方で、作中の人々は味や歯ごたえを持つ食物を求めており、それに加えて食べればある種の情緒的体験ができる食物が「芸術」として売り出され、人気を博すという描写も登場する。第一次世界大戦後、世界的に食糧問題が浮上し、栄養学の発展もあり、その解決策として「人造食糧」という人工的に栄養価の高い食物を作り出すことが考えられると同時に、栄養価と経済性ばかりを重視する動きに懸念を示す声も当時既に見られた（趣味の飲食物史料研究会『趣味の飲食物史料』、公立社書店、1932 年 10 月）。「のんしやらん記録」の食表象はフランスからの影響関係に留まるものではなく、上記のような動向を受けた風刺的性格を持つものとも考えられる。今後、栄養学や食糧問題について更なる調査を進め、食に纏わるナショナリズム的動向と同作との関係について議論を深めたい。

研究発表（研究によって得られた研究経過・成果を発表した①～④について、該当するものを記入してください。該当するものが多い場合は主要なものを抜粋してください。）

①雑誌論文（著者名、論文標題、雑誌名、巻号、発行年、ページ）
②図書（著者名、出版社、書名、発行年、総ページ数）
③シンポジウム・公開講演会等の開催（会名、開催日、開催場所）
④その他（学会発表、研究報告書の印刷等）

①
a.加藤明日菜「矢田津世子「茶粥の記」における食表象試論――戦前期の娯楽的食メディアを中心に」、『立教大学日本文学論叢』第 18 号、2018 年 1 月、94～105 頁
b.加藤明日菜「尾崎翠における食――記号化あるいは物語との相関関係をめぐって――」、『立教日本文学』第 121 号、2019 年 1 月、353～367 頁

②該当なし。

③該当なし。

④研究発表「食糧問題から生まれるユートピア――佐藤春夫「のんしやらん記録」における同時代食文化への風刺と植物化」（名古屋大学・立教大学合同研究会、2019 年 3 月 14 日、立教大学池袋キャンパス）